
嘘の契約者

しお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘の契約者

【Nコード】

N7738W

【作者名】

しお

【あらすじ】

彼女は言った

「貴方は真実が知りたいか？つらい真実を知りたいか？絶望する真実を知りたいか？知りたいなら、私と契約しよう。」

俺は彼女の手をとった。

その日まで普通だった少年は、普通でなくなった。

真実を知りたがる少年の辛い運命の物語

プロローグ

ジリリリリリリ！

目覚ましのうるさい音に不快感を感じながら新羅^{しんろ} 天は目覚めた^{そら}

「ふあゝゝゝあ、ねむっ」

背筋をのばせば170？はあるだろうそのからだをだるそうにうつこかし、自室からリビングへ向かう。

普通の家庭ならリビングには家族の誰かがいるだろう。

しかし、リビングにはだれもいなかった。それどころか、家にはだれもない。

天の父は外国へ単身赴任、姉は行方不明、母は自分を生んだときに亡くなったと聞いている。

天はカレンダーをみてふとつぶやく。五月十八日月曜。

「一か月、五年、九年。もう九年か・・・」

九年は、父が外国へいつてから、五年は、姉が失踪してから、一か月は桂木高校に入学してからの年月だった。

「学校いこ。」

準備を終えて天は家をでた。

まだ天は知らなかった。

これから自分が世界の真実を知り、あらがい、戦いが続く運命に・・・

知ってほしかった。この世界は決してやさしくはないということに。知っていいのか？知らないでいいのか？

真実はいつもつらいだけなのに

知ることは不幸なのだろうか？幸運なのだろうか？

真実はいつもつらいだけなのに

知っているのは

神だけ。

契約

「はっ、はっ、はっ、」

玄関をでて学校まで走っていく。

天ソラの日課だ。

「おー、ソラ、おはよう。」

後ろから自転車に乗った男が天の横につく。

「おうつ、しょうごつ、おはようつ。」

鏡かがみ 翔梧しょうごだ、天の友人で中学からの付き合い。親友といってもいいだろう。

「毎朝ご苦労だな。ほんと、走る距離じゃないのに。」

翔梧の言うとうり天の家から学校は離れていて、普通なら自転車で行く距離だ。

「訓練：なんだっけ？帰宅部なのになんで体きたえてんだ？」

「約束っ、なんだっ」

「とりあえず止まれよ、今から歩いて遅刻にはならないって。」

翔梧がそういうと天は止まって一息ついて歩きだす。

「そんで？約束って？だれと？」

「幼馴染。」

「そんなんいたんだ。」

「いたよ。幼馴染三人と、姉ちゃんと、俺で、毎日訓練して世界を救うぞ〜って。」

「世界って：それっていつのはなしだよ。」

翔梧は苦笑しながら天に問いかける。

「え〜〜と六歳だな。」

「よくやるなあ。」

天をひきつった笑みで見つめながらつぶやいた。

「九年間暇だったしな。」

そんなこんなで天と翔悟は学校についた。

「やべっ！遅刻する！！チャリ置いてくるから先いっててくれ。」

時計を見るとあわてて自転車をこいで走りさった。

「遅刻しないつつたのに。」

天は笑いながら一人つぶやいて教室まではしっていった。

昼休み

昼食を食べようと弁当をとりだすと。

「ソーラッ」

名前を呼ばれて振り向く暇もなく後ろから誰かに抱きつかれる。

いや、誰かとは言ったものの、この胸の感触、髪の毛の匂い、腕の太さ。間違えない。

「またか…翔悟…」

「ありや？ばれた。」

そう、この胸板、朝シャンしただろうが少し汗をかき絶妙なハーモニ―を生み出す匂い（臭いわけではない）、平均的についてる筋肉。間違えようがない。

「なんだお前、最近のマイブームは俺に抱きつくことか？女は諦めて男にはしったか？」

「なんだよ、飯一緒に食おうとしてるだけだろ〜。」

くねくねしながら翔悟が弁当を広げる。

「あ〜〜ソーラ〜〜！！」

後ろから高い声が聞こえる。

「おう、さやか。」

如月 彩夏 翔悟と違って小学校からのつきあいで髪は短い。短い

といっても、女子にしてはであって、ツンツン頭の翔悟やうなじまでしかない天よりかは長く、肩までのびている。

「探したよ〜。」

「同じ教室にいるのに探すって・・・」

「細かいことはいいの！！それより弁当たべよ。」

そっとうと彩夏は弁当をどこから取り出した。

「おお、いいぜ」

気軽に応えると後ろの翔悟が天に顔をつきだしてきた。

「ちよつと、ちよつとお〜。なんでおれはだめでさやかはいいんだよ。！！」

いきなり顔を近づけた翔悟に天は驚きながらことばを返す。

「だまれ。男女区別だ。」

「ひどっ！！」

「はいはい、そこまで」

天と翔悟の顔を押しつけて彩夏が会話を中断させる。

「三人で一緒に食べる！異論は認めない。」

中学からいつもどつりのことだ。最終的に彩夏がまとめる。

「へーい」

適当な返事もいつもどつり。

適当に会話をしていると、彩夏が思い出したように「あっ」と、つぶやく。

「どうした？」

弁当を直しながら翔悟は聞いてみる。

「えとさ、今日もうつすぐ下校じゃん？」

彩夏のいうとおり今日はプールを工事するらしく、生徒は清掃のあとに下校だった。プールなら別によくない？という意見もあったそうだが、今日は工事が校舎も使って大規模の工事が行われるようで生徒に危険がないように下校らしい。

「そっだな。」

またしても、翔悟は適当に返す。

「今日さ、お母さんに頼まれて買い出ししなきゃなんないんだけど。荷物持ちしてくれない？」

「俺はいいよ、暇だし。」

天は間をとらず返事した。

「俺もいいぞ。」

翔悟も即答。

「さんきゅー。じゃ、また後で。」

ブンブンと手をふって天達からはなれて自分の席に着く。

「一緒の教室なのになんであんな手ふってんだ？」

「俺ももどるわ。」

翔悟の疑問には答えず天も自分の席へもどっていく。

放課後 デパート

「いや〜〜買った買った」

満足そうに彩夏が言う

「なあ、ソラ？俺だけか？めちやくちゃ重いの？」

「安心しろ。少なくとも俺もだ・・・」

いま天と翔悟のもっている紙袋の中は、服、本、食糧やなかには木刀や将棋の駒（盤はない）、テニスラケットなどもある。

「つか！日常で使わないようなものが入っていねえか！？」

「気にしない気にしない」

笑顔で彩夏は返す。

「この重さは気しないでいられるレベルじゃねえー！」

翔悟が大声を出すせいで周りからチクチク視線を感じる。

「き・に・し・な・い・・・よね・」

表情は変わらないが明らかに雰囲気が変わった。

「うぐっ！！・・・はい・・・」

翔悟は挫折した。翔悟が彩夏に逆らえないのは、少し理由がある。中学入学したばかりのころ、彩夏の尻をさわったら、ボコボコにされたトラウマがある。彩夏は小さいころから様々な武道を護身術としてならっていた。

「で、まだあんのか？」

天は彩夏に問いかける。毎日体のある程度鍛えてるがさすがにこの殺人級の重さは耐えられない。

「あとはねえ・・・文房具かな。」

「ならそこにちょうどあるじゃ」

ドオオオオオオオオオオ！！

天の言葉が言い終わる前に轟音が響く。

「えっ！？なに！？」「ちよつとおゝなによ！」「事故か？」「だれか！！警察！！」「警察って何番だっけ！！」

そこら中からパニックの音がする。

「おいっ！！誰がいるぞ！！」

誰の声かはわからないが天は反射的にそちらのほうに向いた。

そこには複数の人間がいた。服装はバラバラで統一感を感じられない。なかには修道服などを着ている男もいる。そこまでならいい。

問題は全員武装していること。これもまた統一感は見られずバラバラだった。

「あゝゝだりいから全員うごくな。」

その中でも一際目立つ男がいた。幅が30センチほど、ながさは1メートル20センチ程の大剣を二つ両手にもっている。身長は175センチある翔悟より高い。185センチはあるだろう。

「き、君たち、なにをしてるんだ！！」

警備員が目立つ男に近づく。

「お前は・・・いらねえな」

そつ、呟くと男は警備員のあたまをつかみ文具屋に投げる。

「走れ！！」

天はただ叫ぶ。

「ソラは！？」

「こいつはどうかするから。早く！！さやかをつれて走れ！！」

翔悟は一瞬迷ったが、すぐに彩夏の手をひいてにげた

「美しい友情ってか？おまえはいらねえな。」

男は部下であろうやせた男に「いけ」と、言わんばかりにあごをかたむけた。

その命令に数人反応し翔悟を追う。

「いかせるかあ！！」

完全に不意打ちとなる形でやせた男に頭に木刀を振り下ろした。

仲間がやられたことに気付いた三人の男がそれぞれの武器を構えた。天に一番近い男が短剣を構え突進してきた。

天は慌てず短剣を木刀で受け流す。そのまま首に木刀を叩きつける。短剣男がやらして焦っているのか、槍をもった男と剣をもった男が同時に襲ってきた。

天は短剣男が邪魔で体制を崩す。しかし、それでも慌てず槍の突きを身体をひねりよけ、刃がついていない部分をつかむ。

剣が天の頭に向かって降り下ろされる。

天は槍をひねり槍をもった男の体制を崩す。それにより短時間だけ槍の所有権が天に移る。槍で剣で受け止め、木刀でカウンターを放つ。これで後一人。

天は慎重に槍をつかんだまま、木刀を男に向かって降り下ろす。

しかし、気絶はせず、槍を離しただけだった。

天が木刀を構えると、「ひっ！」と、男は叫びだし逃げ出す。

天はずっと戦闘を見ていた目立つ男に対し構えた。

「お前、面白いな。」

天を値踏みするようジロジロ見てくる。

「・・・・・・・・」

しかし、天は答えない。

「おいおい、だんまりかよ。ほめてんだぜえ。」

「・・・・・・・・」

しかし、それでも、答えない。

「まあ、今から死んでもうなんも言えないから遺言あるなら聞いてやるぞ？」

「生きるから。」

天は力強く言い切り、左手に槍を、右手に木刀を構える。

「はっ！！おもしれえ！！」

目立つ男は剣を振り下ろそうとする。

その瞬間。

ごおおおおおおおおおおおおおお！！

突然強風が吹き荒れる。

「うわっ」

天は情けない声を出し、転ぶ。

「この風は・・・・レグス家か！？」

目立つ男は驚きの顔で目を見開く。

「血の・・・・臭いがするな。」

どこから来たのか突然目の前に一人の少女がいた。

身長は165センチほど、髪は日本人ではありえないエメラルドグリーン、黒いドレスのような服は細い体によくあっている。とても整った顔に冷たい目。

「フム、貴様、ガゼル・レグザだな？」

少女は冷たい目で目立つ男ガゼルをにらむ。

「これはこれは、風の王女に名前を知ってもらえるとは、光栄だな。」

完全にガゼルの視線は少女に目線がいつてる。

（いまなら！！）

天はガゼルに向かって槍をつく、殺す気で。

しかし、簡単に槍を止められる。

だが、天は止まらない。

カッターを取り出し心臓につきたてる。

刃はガゼルの胸につきささ………らない。

「あめえよ。」

槍を奪われ、天を………貫く。

「っ………え？」

貫かれた実感がない。

熱い。

苦しい。

気持ち悪い。

自分の血はこんなあるんだ、以外だな。と、どうでもいいことを考えてしまう。

ガゼルが槍をもって貫いたままてたおれもできない。

少女は冷たい目で一連をみていた。

「体には魔力を流してるからな。ってもうしんだか？」

魔力？と、疑問も出たがどうでもいい。

今やることは………

「っ………ああああああああああああああああああ………！！！！！」

天は叫びだし刃の欠けたカッターを………ガゼルの左目に突き立てた。

「がああああああああああああ！！！！！」

ガゼルは槍を手放し、目を押さえる。

少女は驚いた目で見ている。

「くっ………ああ………」

ガゼルはもがく。

「ぐっ………ガキい！！やっぱてめえおもしれえ！！生きてたらギルドに入れてやるよ！！！」

天に向かって言う。

「すまねえな、風の王女。今回は帰るわ。」

「構わん、私の目的は能力者狩りをやめさせることだったからな。」
すると、ガゼルはビーダマのような玉を取り出しつぶす。

光が周りを包む。

「じゃあな。」

そう言い残し、ガゼルとその部下はきえていった。

少女は天に近づく。

「貴様……」

そういうと、少女は手を天にむける。

「少々不安だが、まあいいか。」

「貴方は真実が知りたいか？つらい真実を知りたいか？絶望する真実を知りたいか？知りたいなら、私と契約しよう。ともに真実を知りに戦おう。」

少女は嬉しそうな笑みで手を伸ばす。

「手をとれば契約は完了し、貴様は生きる。世界の真実を知れる。

まあ、いいこととはかぎらんがな。

さあ、どうする。」

天は、もうろうとした意識のなか、手を取った。

覚悟

「んっ……」

天は目^{そら}がさめる。

目の前には見慣れない天井。

「ソラッ！先生、ソラが！！」

隣から、バタバタと声が聞こえた。

「おはよう、ソラ君、どこか痛むかい。」

隣を見ると白衣の男が立っていた。

だれだ？そう思った直後。

「さやか！……しようこ！！」

思い出した。

五月十八日、彼らが非日常に出くわしたことを。

「落ち着きなさい、彼女らはここにいるよ。」

「ソラ……、よかった……」

翔悟が抱きついてくる。

「じゃま、ウザイ。」

それだけ言つと翔悟を殴るとぐぼお！と、いいながら倒れる。

「心配したよ、ソラ。」

安心したように、彩夏が涙をぬぐっていた。

「彩夏も無事でよかった。頑張ったかい？少しはあったかな？」

「お腹に穴開けるまでがんばれば十分だよ。」

彩夏の言葉に驚愕した。

「お腹に穴？」

「そうだよ、君が生きてるのは奇跡に近いんだよ。」

白衣の男が話しかけてくる。

「えっと……」

腹をさわってみるが痛みもない。

「かなりの出血に、内臓がやられていたのだけど五日で完全に治っ

てしまった。どうなっているか調べたいね。」

危ないことを言い出したので少し話題を変えた。

「五日つてことは土曜日ですよ？退院はいつ頃ですか？」

「なんともないなら、すぐに退院してもいいよ。ただし、一時から警察の方がいらっしゃるからそのあとにね。」

「警察？」

時計を見ながら問う。

11時12分。

「さつき君が目を覚ましたと伝えたと、事情聴取するからって。」

「そしたら帰っていいですか？」

「構わないよ。それではまた。」

そう言い残すと、医者は病室からでていった。

「ねえ？あの後何があったの？」

医者がいなくなると黙っていた彩夏が問いかけた。

「あ、それ俺も気になる。」

翔梧も会話に参加した。

「何って、……あ。」

「？」

彩夏が不思議そうな顔でみてる。

思い出したのだ。契約がなんやらといていた彼女の存在を。

「あ、あれから、木刀で時間稼ぎしたら、えく槍で刺されて。ハハ」

嘘ではない。だが彼女のことは話したらいけない気がした。

「フーン。それだけ？」

「それだけ。」

嘘をついた。

「よく死ななかったな？ほんと良かったよ。」

翔梧が話しながら、腰をあげる。

「帰るわ、宿題あるしな。」

「じゃ、私も。」

彩夏も席を立つ。

「ああ、また月曜日。」

病室にだれも居なくなる。時計を見る。

11時32分。

「寝るか。」

毛布を被り直し、寝直す。

1時になると、警察がきて事情聴取が始まった。しかし、適当に何も覚えていない。と、嘘をついた。終わったのは2時だった。荷物もなかったので15分後には外に出れた。そのまま家にまっすぐ向かう。帰り道、あの時のことを考えていた。魔力、風の王女、才能、契約、真実。訳の解らないことばかりだ。そんなことを考えていると家にたどり着いた。鍵を開け扉を開く。

「ただいま。」

誰もいないことが解つていながら挨拶する。しかし。

「ん、帰ったか。お帰り。」

確かに家は誰もいないはずなのに、聞き慣れない声が聞こえた。いや、聞いたことがある。

「なんであんたがここに!？」

風の王女と呼ばれていた少女がいた。

「貴様とは契約したもののどうしたろう?別に構わないだろう。」

「いや、なんで俺の家が分かったんだ?」

そんなことより重要な質問が沢山あったが、とりあえず、理解出来そうな質問からしてみた。

「魔術だ。」

理解できなかった。

「えと、とりあえず名前は?俺は新羅天^{しんらかてん}。」

「私は、ティア・レグスだ。ティアでいい。」

何処の国の人だろうかと考えたが話をつづけた。

「えっと……魔術って魔法みたいな?火とか風とか操ったり?」

「魔法……ではないな。魔力を使うことはすべて魔術と言うからな。」

少し空気を読み「なにか飲む？」と、聞いてみると、「コーヒーか紅茶でたのむ。」と、かえってきたので隣の台所に向かう。

「じゃあ、魔力って何？」台所で紅茶の準備をする。

「強さだ。」

「強さ？」

ティーカップを出し紅茶をつぐ。

「魔力が強ければ戦闘の幅が広がり勝率が上がる。自分の魔力を100として相手が101なら勝率は10%だと言われている。まあ、魔力に限った話だな。」

ティアの前に紅茶を置く。

「ん、ありがとう。」

紅茶をすすする。

「実際、技量や判断力、時の運なども大きいかな。」

自分用にコップに麦茶をそそぐ。

「それはやつぱり……殺し合い？」

問うことに少し迷う。

「ああ。」

かえってきたのはそつけない返事。

「これから人を殺すようなこともあるだろう。戦った相手の人生を狂わすことにもなるだろう。そいつの家族は貴様を憎むだろう。もちろん貴様が死ぬ場合もある。誰もが自分の正義を貫こうと貴様を必死に殺しにかかってくるぞ。貴様にその覚悟があるか？」

人を殺す。そのことに一瞬迷う。しかし、答えは

「人が死ぬのを見て怖かった。自分もああなるかと思ったら動けなかった。でも、あんなことが起こっているなんて知ったのに、あらがえる力があるのにじっとしてるのは、たぶん耐えられない。だからあらがおうと思う。どこまでやれるかわからないけどやってみよう。」

強い思いを込めて言い切る。

「そうか、なら正式に契約は完了だ。」

「これからよろしく。あと、貴様じゃなくてソラでいいよ。」
ティアにむかって手を伸ばす。

「ああ、よろしく。ソラ。」
手をとる。

今一組の契約者が生まれた。

覚悟（後書き）

短いけど勘弁してください

> (| | ;) <

次から戦闘入ります

魔力（前書き）

遅れてごめんなさい

m (—) m

魔力

紅茶を飲み終わると、ティアに庭へ引っ張り出された。

「とりあえず、契約してくれたことに礼をいう。」

唐突に言い出す。

「いや、俺こそ助けてありがとうだよ。俺が死ななかったのはティアの契約のおかげなんだろう？」

相変わらずの表情の固さで答える。

「ああ、あの時はすでに契約は完了していたことになっていたからな。ソラに魔力を与え回復に専念するようにしていたからな。」

「ほら、だからおあいこだろう？ たぶん。」

なにをしたかよくわからなかったが笑顔で返す。

違うとばかりに首を横にふる。

「違う。私はソラがさっきの質問にないと答えたら私はソラ、君を殺さなくてはいかなかった。」

天は驚いた。

「えっ！！何で。」

背筋がゾクツとした。

「契約したまま無駄に生きてもらう訳にいかんからな、ソラを殺してまたさまよっていたさ。」

ティアが言い終わると、天はクスツと笑った。

「どうした？」

「いや、さっき、人を殺す覚悟があるか？とかいってからさ、てっきり人を殺すことに抵抗を感じてないかと。だから、うれしかったんだよ。ティアがそんなやつじゃなくてさ。」

心からそう思った。

「まあ、な。私も殺すのは嫌いだよ。慣れてはいる、がな。」
歯切れ悪くそういった。

「そんなことより、はじめよう。」
会話がイヤになったか、話を変えた。

「なにをすんだ？」　なにも知らない天はなにもしようがなかった。
「まずはやってみせるさ。」

右手を前に突き出す。
瞬間、空気がかわる。

ティアの右手から淡い緑色のなにかが見える。
あたりに風が吹く。一瞬目をつぶってしまう。
目を開けると、ティアは右手に剣を持っていた。

形は一般的な西洋剣。しかし、異様に美しい。
その剣は女性であるティアが持つていても何も違和感がなかった。
その美しさで戦場にでるととてもおもわなかった。

「それも、魔術？」

「ああ、これは私の固有魔術、《絶風》（ぜつふう）の力の一つだ。」

「固有魔術？」

首をかしげる。

「魔術にも種類がある。まず誰でも使える^{たいまいじゅつ}体魔術、詠唱魔術。体魔術は身体能力向上の魔術。詠唱魔術は詠唱する事で魔力を効率よく放出する魔術。詠唱魔術は魔力を余分に消費することで詠唱を破棄できる。戦闘じゃあ詠唱するほうが珍しいがな。次に限られたものにしか使えない魔術。固有魔術と義魔術^{ぎまじゅつ}。固有魔術は能力者の中にも限られたものに発現する能力。それぞれ特有の能力を使えるようになる。義魔術は、固有魔術持ちの能力者が死んだ場合魔力が強いものはなにかしらの武器に形を変え、その武器に死んだものの固有魔術が使えるようになる。ほとんどが魔力が弱くて使えんがな。」

長い説明を聞き終えると、頭に手をあてて整理する。
「俺に固有魔術は発現してるのか？」

「契約したら契約者は能力者でも才能が無くとも固有魔術は発現する。」

すらすらとあらかじめ聞かれると分かっていたかのように答える。
「なら、俺は体魔術と固有魔術を覚えればいいんだな。」

整理がつき、自分がやるべきことを確認する。

「驚いたな…もう理解したか。」

表情が固いティアに珍しく、本当に驚いたように言う。

「別に？まだ聞きたいことは沢山あるしわからないこともあるけど、今は出来るだけ強くなって、出来るだけ友達を守れるようになりたいんだ。あつ…もちろんティアもなつ。」

足を伸ばしたり、手首を回したり準備運動をする。

「じゃあ始めようか。まずはソラの固有魔術を確認する。さっき私が出したように手を前にだし魔力を集中させる。」

言われたとおり、手を前に出す。

（そついや、魔力ってどう動かすんだ？）

ティアの淡い緑の光が魔力なんだろうが自分にあるかどうかもわからない。

（あーっ！！もうつ！！適当だあ！！）

強く、拳を握る。

瞬間。

ごう！！

天の体が黄金に輝く。

それに天は気付いていない。

（なっ！？何だこの魔力は！？あり得ない！！ソラは才能は欠片もなかった。魔力が発生する要素は契約だけ。だがこの魔力の量ははるかにそれを越えている。）

魔力の量が強く、周辺に衝撃が伝わる。

「っ……はあ！！」

魔力が吹き出す。天の周辺は黄金の輝きに包まれる。そして、天

の手には刀が存在していた。日本刀に近いその刀は日本刀より少し長い。15歳の天には不釣り合いだがなぜか刀は手ににじむ。

「ふむ、刀、か。それで魔術の使い方だか、」

「あ、それいいや。」

ティアの言葉を遮り、説明を拒否する。

「？」

確かめるように、刀を握りしめる。

「魔術の使い方とか、こいつの名前とか、全部分かった。」

刀を前につきだす。

「こいつの名前は神那かみなそんで俺の能力は、」

見せつけるように、神那を構える。

バリバリバリッ

突如神那から電気がほとばしる。「雷を操る能力っぽいな。」

軽く言う天だがティアは深く考えていた。

（固有魔術のサブである固有武器を召喚しただけで魔術が使えるようになるだとか？あり得ない、いや今日の前にあり得るのだからあり得るのだろうな。……少し試してみようか。）

ティアは、人差し指をたてる。

「…っ!!」

何かがとつりすぎる感覚がした。

「魔力感知も並以上か。」「何を……したんだ？」

冷や汗がでる。

「結界をはった。結界内で何しようと、外からはなにも感知出来ない。強い魔力を持った能力者以外はな。ソラも覚えてもらおう。それより、刀を構えろ。」

ティアの剣の切っ先が上がる。

「安心しろ、試すだけだ本気でやるつもりはない。」「ティアが危ないだろ?」「いくら契約で弱っているからといって、実戦経験もないものに負けはしない。」

弱っているということが気になったが、神那を構える。

「本気でこいよ？」

ティアの言葉に答えず、切っ先をティアに向けて走りだす。
ギーン！！

刃と刃がぶつかる。しかし、それは一瞬。即座に神那を引き、右下から振り上げる。それをティアは剣で払う。再び元の位置に戻った神那の勢いを殺さず一回転。その間に刃を半回転させ振り下ろす。次は払わず剣で止める。

「魔術を私には勝てんぞ」止められたまま会話は続く。

「……………分かった。」

ティアは空気が変わるのを感じた。

瞬間。

止めていた神那が引かれ、左下から振り上げてくる。「っ!？」
下がってなんとか避けるがすかさず天は追撃する。神那を水平に構え、突きの構えで突進する。

神那には雷がほとばしる。

(雷!?!ここまで魔術をすでに!?!)

予想をはるかに越えた出来事が驚いているが、その程度で動きが鈍るティアではない。

剣で神那の切っ先をずらす。ティアの左側にそれる。しかし。

ゴォォ!!

すぐ左に雷が流れる。

(!?! 魔術のコントロールも魔力の量も並み以上だな。)

剣を返し、天の顔に向かい振る。

「っ!?!」 天の鼻先まで刃が届くまで数センチ。もちろん斬るつもりはない。剣に伝わる魔力を調整している。

(終わりだ。)

そうティアは思った。

しかし。

「っらぁ!!!!」

天は体全体を無理やりひねり、反らしティアの剣を避ける。結果、

ティアの剣は天の上半身を沿うように流れる。そのままひねる勢いで右手に持った神那をティアに向けて振る。

（しまった！！）

天は完全に夢中で今自分の持っているものが真剣ということ忘れていた。

（やべえ、止められねえ！？）

神那はティアに迫る。

瞬間。

ゴォー！！

突風が吹き荒れ、天は吹き飛ばされる。

「痛っ…ゴメンー！！危なかった！！」　すぐ起き上がりながら謝る。

「いや、いい。それより全力でこい。……少し油断していたな。」

「いや、でも危ないし……」

「神那に流す魔力をうまく調整すれば切れ味をおとすことが出来る。」

「言われたとおり神那の魔力を調整する。」

「こんな感じか？」

「ああ。」

「よし！！じゃあ、始めるか？」

「少し？」

突然声が小さくなった。

「少し…私も楽しくなってきた。」

ティアの周囲に突風がふく。

「いくらでもかかってこい！！」

天は黙って神那を構える。

「いくぜ。」

直後に飛び出す。神那を右下から振り上げる。先ほどと同じ剣の振るいかた。

それをやはり同じように払おうとする。だが、これからは違う。

天は突然神那を離した。

「！！？」

予想外だったらしく、ティアは驚愕の顔をする。
左手でティアの右手をつかみ、剣を封じる。

「全力なんだろ。」

笑顔で天は確認する。

それにティアは微笑でかえす。

「ああ、そうだ。」

聞き終わると全力でティアを殴る。

「くっ」

ティアは少しのけ反るが右手を掴んでいるので離れない。

「もう一発。」

手を振りかぶるがティアの左手が右手首に添えられ、止められる。
すかさず右手を掴まれる。

天の右手はティアの左手を。ティアの右手は天の左手を掴んでいる
奇妙な体制となった。

お互いに力を入れる。数秒緊張状態がつつぐと突然ティアは力
を抜き足を器用に動かし、天の足を払い、投げる。止めに天の短い
浮遊時間に風の衝撃波を叩きつける。

またもや天は吹き飛ばされる。

受け身を取り、すぐに起き上がり神那をさつき落とした神那を拾
おうとする。

ティアはすかさず神那と天の間に入り、妨害する。

「よく頑張ったが、ここまでだな。」

「……っ！？」

剣がふりおろされる。

キン！！

それはティアの予想外の結果だった。

ティアの後ろにあるはずの神那が天の右手にしっかりと握りこま
れていた。

「……っ！？こんなこともできるのか……」

天は神那をひいて軽く蹴りを入れようとする。

（あ、……………？）

しかし、体が思うように動かない。力が抜け神那を落とす。

「技術もよし、魔力の量もよし、魔力の扱いも最初にしては上出来、だがまだ慣れがないな。魔力の配分がなっていない。」

返事をしようにも言葉が出ないほど一気に疲労感が襲う。

「明日から訓練だな、日常生活もしっかりこなせよ。」

その言葉を最後に聞き天の意識は途切れた。

魔力（後書き）

もう少し早く投稿出来るようします。
感想、レビュー受け付けます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7738w/>

嘘の契約者

2011年11月20日17時46分発行